

体験と表現の連続性について

～作品展「木」への取り組みを通して～

堂本真実子（学校法人 若草幼稚園）

1 はじめに

本園は、高知市中心部に位置し、4 学年、園児約 200 名が在籍している。^(注1)毎年 11 月に PTA バザーと共に作品展を設け、子どもたちの制作を保護者に向けて発表する。一昨年前の「海」に引き続き、昨年のテーマは「木」である。本研究は、本園が所有する「すくすくの森」^(注2)での「木」との体験が、各学年において、どのように表現へと結びついていったのかについて、明らかにするものである。

2 体験と表現

（1）2 歳児 森に親しみ、素材で楽しむ

① 森に親しむ

およそ、入園までの間に「森」という環境に親しんだことのない 2 歳児にとっては、まず、「自然に囲まれる」ということに慣れ、そこに居ることを楽しい、おもしろい、心地よいと思うことが先決である。それには、何かに興味をもって着目すること、それを他者と共有することの積み重ねが大切である。あらゆる物の不思議に心が動き始めれば、「森」はあつという間に、子どもたちにとって魅力的な場所へと変わっていく。（詳しくは、堂本真実子「同じものを探そう」2013 を参照 ^(注3)）



② 素材で楽しむ

2歳児の表現は、イメージをもって意図的に臨むというよりは、その「行為自体を楽しむ」というところが特徴である。そして、その結果が美しいこと、やった感があることが大切である。ここに、保育者の教材研究が深くかかわってくる。

a 色を楽しむ

保育者手作りのタンポをつかった「スタンプトントン」を、一年を通じて楽しんだ。「すくすくの森」で出会った虫や葉っぱ、季節にちなんだものを題材に選び、子どもたちは、自分の行為の結果から現れるグラデーションの美しさや、色ができるおもしろさを感じていく。



* トントンしすぎて、紙はやぶれるほど

b ドングリで楽しむ

作品展に向け、すくすくの森の木が落としたドングリで制作を楽しむ。まずは、ガラガラガラガラいわせることがおもしろくて仕方がない。ドングリが四方八方に飛びっ散っていくほどである。そのうち、どんぐりの動きの跡が気になり始める。手がゆっくりと動くようになり、「確かめながら動かす」という動きが生まれる。おもしろくて、一人が何枚も何枚も取り組んだ。



ガラガラガラガラガラ！



なるほど、こう付く・・・。

c 描画

試しに、作品展に向けて「すくすくの森のこと描いてみよう」と投げかける。あまり乗り気でない子、まったく関係ないことを描く子どもも多数いた。描いてみようといわれて、その時想起するものを描き、そのとき自分がいいと思った色を選ぶところが2歳児の特徴である。



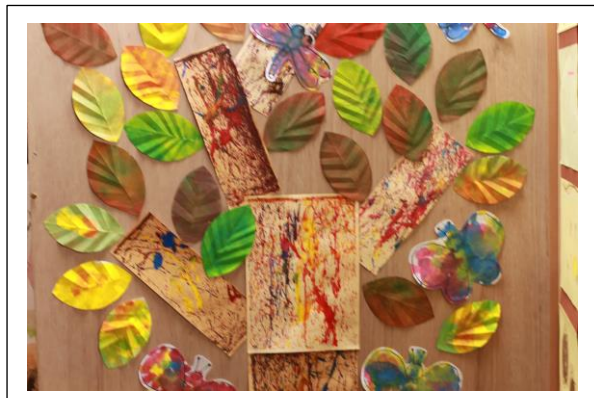
＊「スポーツカー」「パトカー」「カラス」
「キュウリ」「どんぐり」が描かれている。



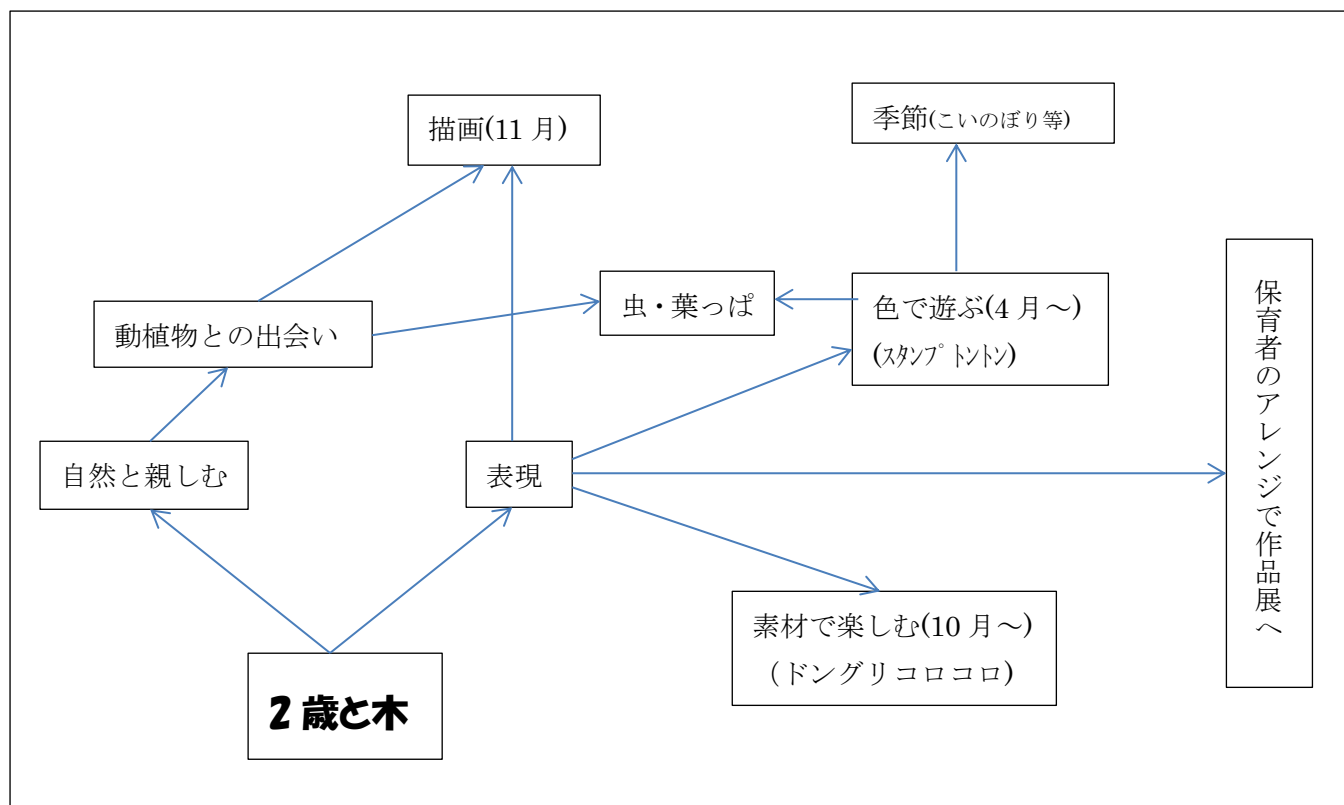
＊「バッタがたくさん チューリップに
蜜をのみに来てるの」

(2) 作品展へ

保育者のアレンジによって、これまでの2歳児の表現を「木」につなげていく。「どんぐりころころ」を木の幹に見立て、「スタンプトントン」で塗った葉っぱで「木」を作り、虫を飾る。まだ体験が記憶の中でつながっていかない2歳児には、その時々充実を保育者がまとめていくかたちがふさわしい。



<2 歳児の取り組み>



(注)

①学校法人 若草幼稚園 HP <http://wwwa.pikara.ne.jp/s18418/>

②堂本真実子「子どもと自然」『子どもの世界 子どもと自然／科学Ⅲ』矢野博之編著 大学図書出版
2013

③堂本真実子「同じものを探そう」『すごい！ふしぎ！おもしろい！子どもと楽しむ自然体験活動』
日本ネイチャーゲーム監修 神長美津子・酒井幸子・田代幸代・山口哲也編著 光生館 2013

(2) 年少児「木の落とし物」～素材とのかかわりからイメージを広げる

まだ遠景でものを見たり、全体像を描く力を持たない年少児にとっては、「木」に注目させるよりも、そのものに関わって表現することがふさわしいと考えた。そこで、木の落とし物を使った造形表現で、作品展に臨むことにした。

① 木の落とし物

保育者手作りのマイバックを持って、森に行く。
最初は、目についたものを片っ端から入れていく。

拾ったものを身に着けても遊んだ。



② 造形

a 平面で並べる

初めてマイバックに木の落とし物を集めたとき、拾ってきたものを、貼ってみようと投げかける。この時はセロハンテープを使う。

次の回に、森で小枝を拾ってきて絵を描いてみようと思っかける。この時には、出来上がりの美しさをねらって、ボンドを導入する。この後、「並べる」「置く」にイメージが加わるようになり、森で木の落とし物を選んで拾うようになる。



b イメージの広がり と 技能の習熟

イメージの広がりに応じて、廃材や自然物を加え、さまざまな造形表現を楽しむようになった。ボンデにも習熟していく。



最初は、盛る、乗せるという動きが主。



紙粘土を取り入れることによって、よりイメージが具体化していき、見立てがどんどん発展する。作りが丁寧になり、素材を大切に扱うようになる。



状況も含めてイメージするようになる。



*すくすくの森の池。カエルやワニがいる。

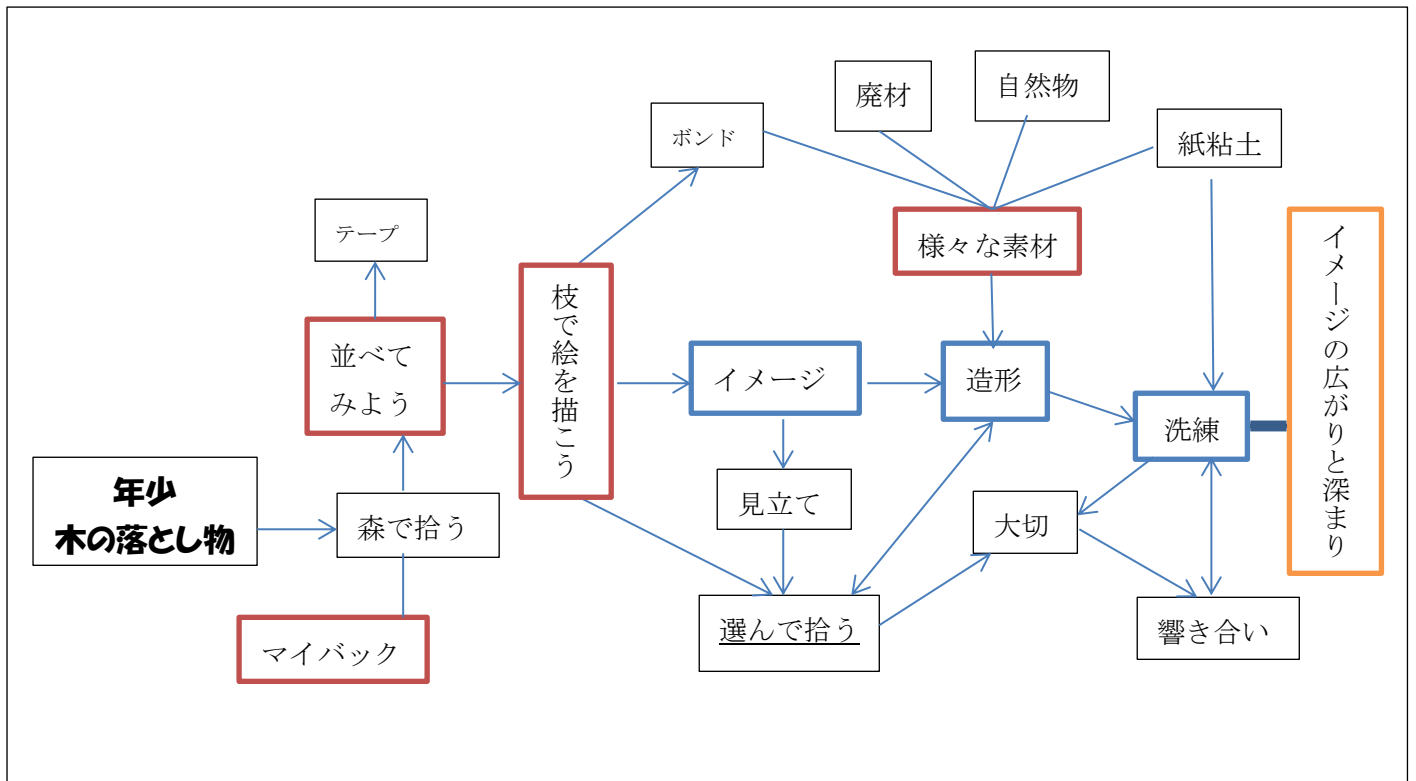


*鬼遊びで楽しんでいる「むっくりくまさん 穴のなか〜♪」隣はすくすくの森で出会ったモグラ

友だちのものに興味を持ち、一つ一つを大切に思う。



<年少児の取り組み>



保育者の投げかけ、環境構成
 子どもの経験の流れ



(3) 年中児 木に出会う ～感じたままを表現する

① 木との出会い

a 竹と出会う

最初の感動は竹との出会い。森に行くたびにぐんぐんと伸びている竹に、命を感じた。



この感動を通して、動いているように見えない木々もゆっくり動いているのかなと思うようになった。

b 魔法の糸電話

魔法の糸電話で、木とお話する。

木のあかちゃん、おじいさんと家族と重ね合わせて木を感じていく。森に行くたびに、日課のように、木を抱きしめ、耳をあてる姿が見られた。



c ミニ森

すくすくの森で見つけたドングリの実から芽を出した赤ちゃんの木（小さな苗木）や小さな小

さな木の芽を木箱に植え、土の上に苔を敷いてミニ森をつくる。森で採った時にはぺらぺらだった葉が、お日さまの下で日光浴をさせた後しっかりと固い葉になったのだが、子どもたちは、「カラカラになって木がかれるき、いかん！」と担任を止め、心配する様子があった。森では、赤ちゃんの木に直射日光が当たることがほとんどないことを、子どもなりに感じており、日干しの状態が通常の木でないことを、感じ取っていたのだろう。

ミニ森に興味を持ち、「先生、ちょっと大きくなったで！」「天井まで、こ～んなに伸びたらどうする？」とわくわくしながら見ている様子があった。

② 表現を楽しむ

a 色を創る

Tシャツの形の和紙を水に濡らし、赤、青、黄色の三原色を使って濡らし絵を楽しむ。絵具を置くと、ふわーっと色が広がっていく。そこに異なる色を置くと、美しい色のグラデーションができ、虹色、水玉、縞々とさまざまなTシャツが出来上がった。

また、葉っぱの形の和紙でも濡らし絵を楽しんだ。



b 色にきづく

「木」を塗るとき、森に行って「木は何色だと思う？」と投げかけた。すると、即答で「茶色！」という答えが返ってきた。そこで、保育者が取り出したのは茶色の色紙！木の幹に乗せると、「えっ、違う！」と驚きの声があがった。「じゃあ、何色だろう・・・。」と探してみると、「ここは灰色、ここは緑、ここは、・・・ピンクみたい」と木の色は茶色だけではないことを知った子どもたち。（「作品展だより」より）この投げかけが、「木」の制作で色を創る子どもたちの姿に生かされていく。

c 心が動いたものを描く

すすくすの森で出会ったものを、自由に表現する。

対象の形態の特性を捉えて描く。（クレパス）



*すすくすの森で釣ったイモリ



*たけのこ

墨にも慣れていく。



d 木を表現する

作品展に向かって、木の表現に取り組む。「何の木を描きたい？」と尋ねると、すぐに「赤ちゃんの木！」「ヒサカキ！」「おとなの木！」「ゆずの木！」と迷うことなく、答えが返ってくる。そして、保育者の心配をよそに、大きな和紙を前に、たつぷりと墨を含ませ、トンと筆を下したかと思うと、全体重を傾げるかのように力強い線を上に伸ばしていった。（「作品展だより」より）

墨で描く



色を塗る。自分で選んだ色をお盆の隅に置き、溶かしながら、混ぜながら、色を創っていく。



*全身を使う



*遠景で、全体像をチェック！！

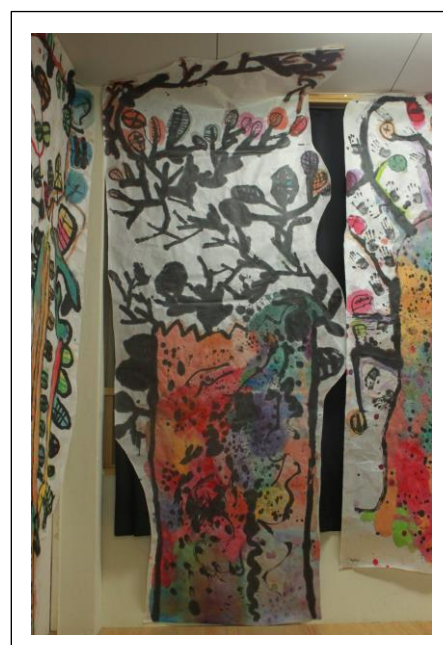
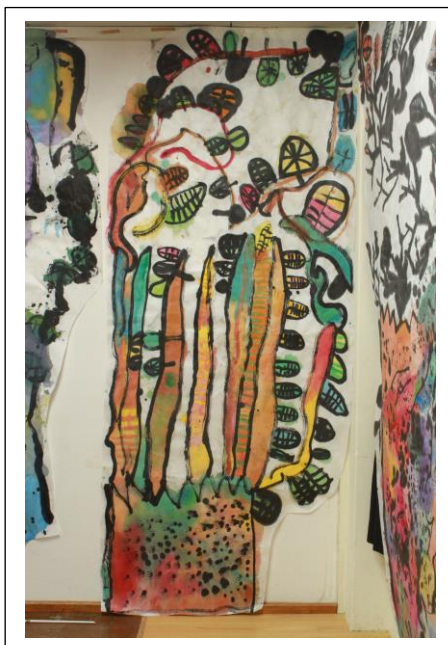
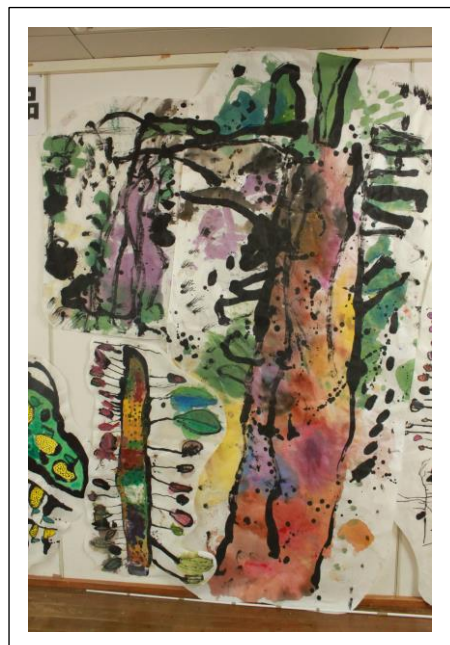


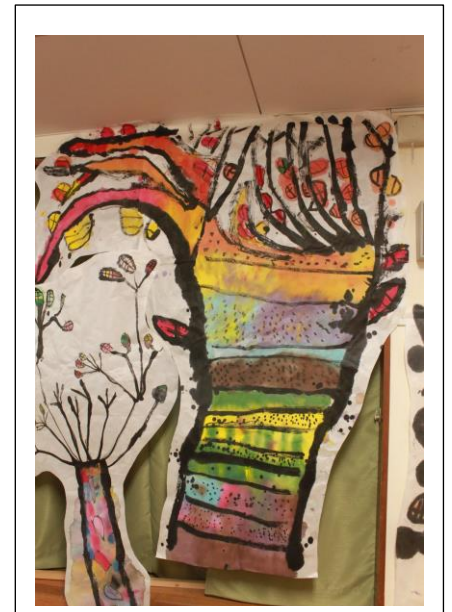
*なんとなく、二人の動きが呼応している



*足型の模様！

完成

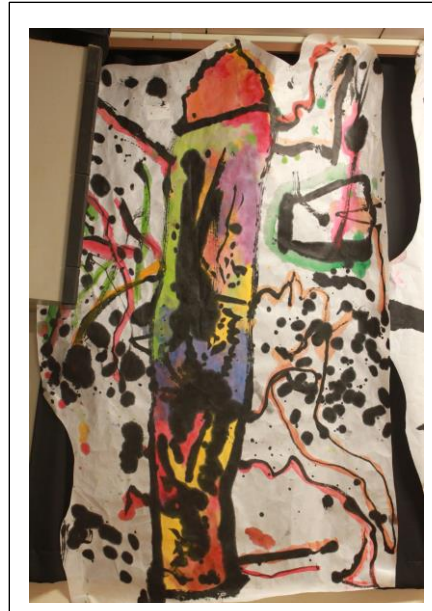




いろんな木



*ファイヤー！！



*お家の木



*お姫様の木

③ 保育者と子どもが創り上げる「木」

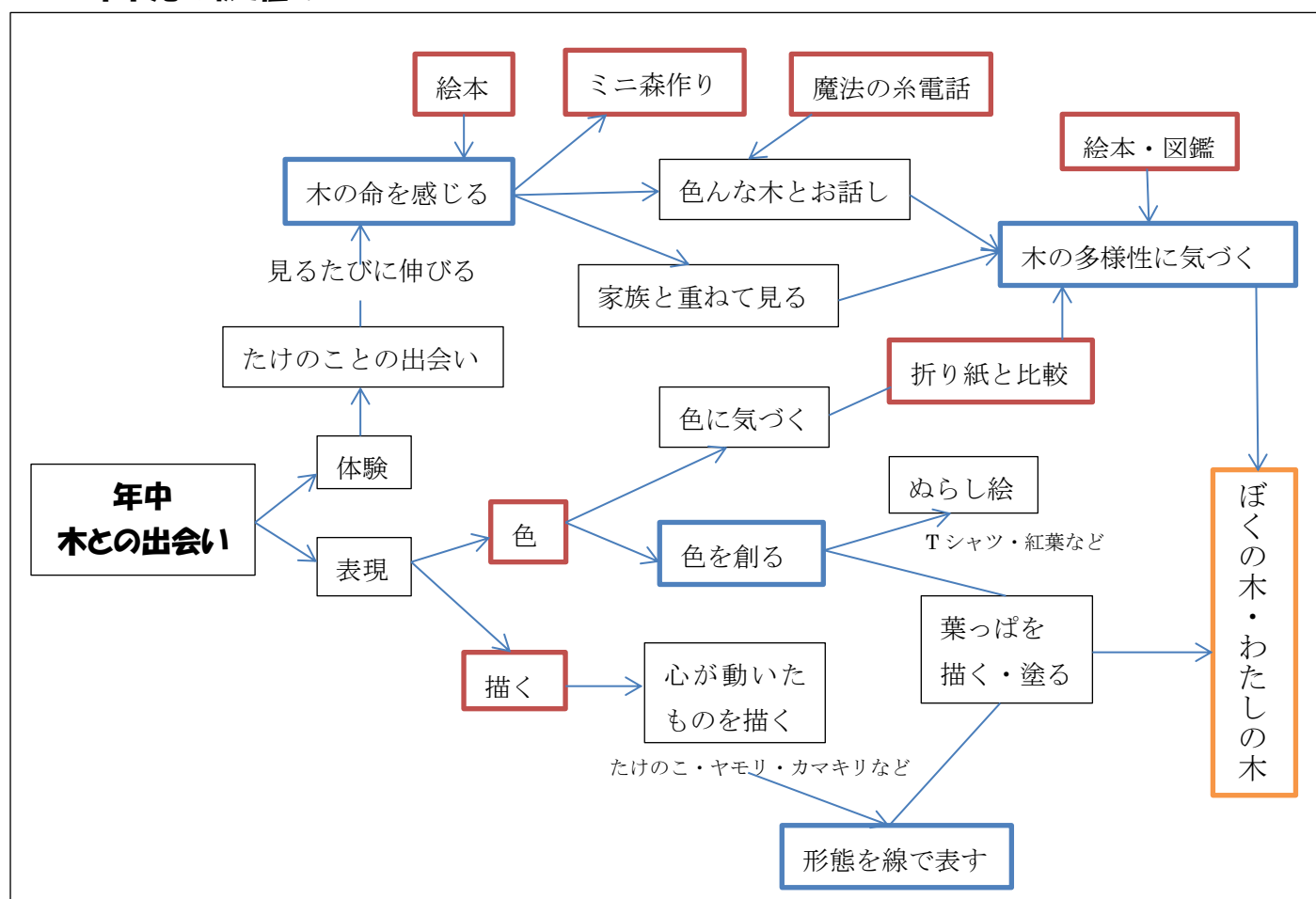
年中児のこれらの作品を見ていて、私が強く感じたのは、「これは保育者との共同作品」であるということだった。それぞれにクラスのカラーがあって、自由で力強い作品の多いクラス、ナイーヴで精神年齢の高そうな作品の多いクラス、穏やかでメルヘンチックな作品の多いクラスと、なんとなくクラス担任と子どもたちとの間で作られている関係性が象徴されているように、私には感じられた。保育者がメルヘンチックなのではなく、子どもと保育者の間にそのような柔らかさがあり、また、経験2年目の保育者と子どもたちの間には、若さと奔放さを象徴する力強さがある。筆を振って模様を描いたから、後で掃除するのに大騒ぎだったとか、足型つけたいと言ったからジャンプ台を用意するというのは、ある意味最高の援助である。そして、経験年数15年近い保育者でも、おっちょこちょいであるが故に、子どもがしっかりすると言えなくもないだろう。もちろんそこには、子どもの心の機微に触れる保育者

の繊細さも、また加味されている。

もっと具体的なところでいえば、紙の大きさがある。どの作品もまちまちである通り、大きさは子どものなかで自ずと決まってしまうものである。その自ずと決まるものについて、ある予測を立てて先に紙をおくのは、保育者である。アイズナーは、視覚的美術形態（描画）の制作において必要な能力として、4つの視点を示しており、そのうち「制作材料の枠内で作者を満足させるような形態を想像する能力」と「空間の秩序、美的秩序、情緒的形態を創り出す能力」が必要であると述べている。^(注1)保育者は、彼らの手の動きやスピードを感じながら、紙の長さや大きさ、紙を足す方向を選定していったのであろう。もちろん、対話もあったろうが、結局その按配は保育者に任されている。そうして、どの子どもも深い充実感と達成感を持てる作品を仕上げることができた。つまり、子どもたちは満足の行くかたちで、制作材料の枠内における空間的秩序、美的秩序、情緒的形態を達成できたのである。それを可能にしたのは、子どもの制作活動に保育者が深く没入していたからである。また、担任3人とも、非常に絵が上手である。やはりこれも大きく関係しているだろう。

「僕も描きたい」「私も描きたい」「まだ？」「早く描きたい」という子が続出する中で、絵が苦手、なかなか描き始められない子もいる。それでも、周りに憧れをもって、友だちの姿に支えられて意を決する。そのタイミングを、保育者はぜったいに逃がしたくないと思っている。そして描きはじめれば迷いなく、筆は動いていく。保育者と二人でファイヤー！！と叫びながら描いたこともあったようだ。子どもを支える保育者の想いが、この作品を創り上げたのだとも言えるだろう。

<年中児の取り組み>



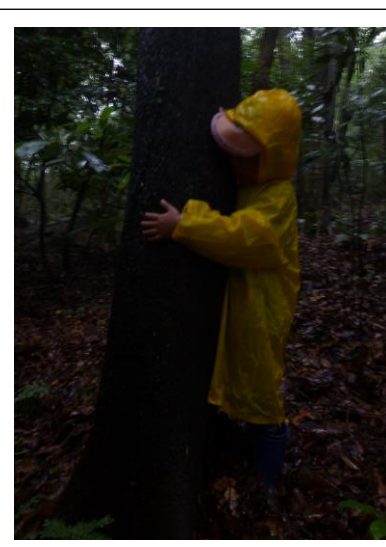
(注) E・アイズナー「美術教育と子どもの発達」黎明書房 1986 p121

(4) 年長児 木に出会う ～対象を取り込んで表現する

① 「木」と話そう

年長児でも、「木と話そう」という活動を何度か取り入れた。年中児の直観的な軽やかさとは異なり、対象に入り込んでいく姿が見られた。およそ、5、6分も木と共におり、「おはようって言ってくれた」「心があったかくなった」という声がきかれた。そのほか、「気持ちよくなった」「遊びたくなった」「木に絵本を読んであげたい」という子など、人は「自然」や「木」にシンパシーを感じるものだということが、改めて実感された。

それでも中には、「木はしゃべらん」と言い続ける子どももいる。そこで、年長でも「魔法の糸電話」を取り入れてみた。それがきっかけで、「……、よく来たね、やって」「……、10歳です、やって」と思ったことを次々と言葉にし始めた。どこかで、木と心を合わせたいと思っていたのだろう。

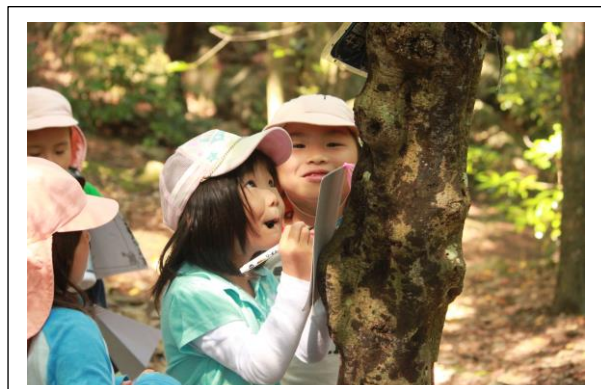


*雨の日もじっと……。

② 木のフィールドビンゴ

一方で、「木はしゃべらん」という子どもの見方も大切にしたい。これは、科学に通じる認識の目でもある。子どもは「木」と情緒的にかかわる一方で、「わかりたい」とも思っている。対象に思いを寄せながら、その対象をわかろうとすること、これこそが育みたい科学的態度である。

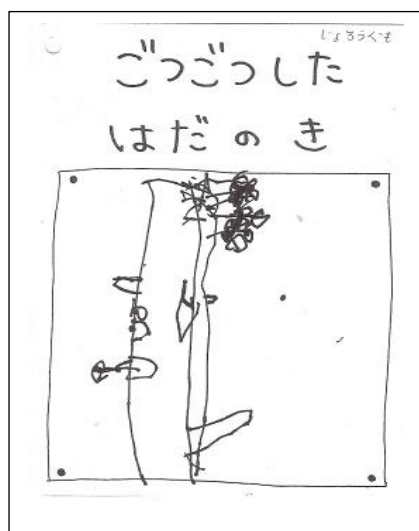
そこで、「木のフィールドビンゴ」という活動を取り入れた。「くねくね曲がっている木」「赤ちゃんの木」など、なんらかの特徴をもつ5つの木をグループで探すというものである。全員が、「そうだね」と共有した木をメンバーの一人が写生することにした。





子どもたちの間でなかなか一致をみなかったのが、「ごつごつした肌の木」であった。担任によると、ある木について、「ブツブツ」「つぶつぶ」「バリバリ」など、それぞれ感触は似ているようだが異なる言葉の表現があり、譲る姿がほとんど見られなかったようだ。また、保育者から見て、「それはごつごつではないだろう。」という場合でも、所々「つぶつぶ」した木を「ごつごつ」と言ったり、木のコブを指して「ごつごつ」と言う子もいたようである。

皮膚感覚を言葉にうつすとき、その背景には個人の体験の履歴がかかわっている。おそらく、大人は「バリバリ」と「ゴツゴツ」についてある程度の区別がつくだろう。それでも、微妙なもの場合は、「どうかなあ。」とお互いに首をかしげる。子どもたちの間で、ほとんど譲る姿が見られなかったということは、皮膚感覚を通して感じたことは、他に変換がきかない、その人にとって確かなものであるということがわかる。だからこそ、体験が大切だということだろう。



子どもが描く絵は、どれも幹の先端が線で切り取られていることが特徴的である。子どもたちは、見つけた木のすぐそばで、座って絵をかいており、ほぼ 90° 真上を見上げて描くので木の先端は見えない。実際に、葉っぱや枝で隠れて平らに見えていたようだ。担任も、子どもの位置まで体を低くして木を見上げると、子どもたちの描く絵のように見えたようだ。

大人は、きっとこのようには描かない。表象の力によって、見えない先端部分をまるであるかのように予想しながら描けからである。子どもたちの絵から、いかに彼らが外界を見たままに受け取っているのかということがわかる。

一方で、彼らは自由に絵を描くときには、木の全体像をよ

くある記号化されたかたちで描く。だからといって、決して木の構造がわかっているわけではないということである。これから先、幹と枝の関係が分かり、枝と葉っぱの関係が分かり、その関係性を木の特性として一般化し、今見えていない場所でも、きっとそうであろうとイメージできる力が備わって初めて、大人にとっては自然に見える木の絵を描くようになるのだろう。

これは、単なる知識として、言語によって伝達すれば理解されるものではない。実際に木を見て、触れる中で培われるものである。その意味で、子どもには豊かな体験が必要なのである。(詳しくは、堂本真実子「木のフィールドビンゴ」2013 を参照^(注))

③ はっぱを描こう

最初は、一人一本の木を描く予定だった。しかし、年中の様子を見ていて、何か違うと感じ始める。そこへ、偶然にも担任が取り入れていたのが「葉っぱを描こう」だった。これを見たとき、子どもの内的なニーズにぴったりと合っていることがわかり、急きょ、これを作品展の作品にしていこうと方向づけた。「分かる」「見える」、そのことを描き表わしたいと思っている子どもたちにとって、「葉っぱ」という教材は大きさ、形、色、すべてにおいて、ぴったりであった。

葉っぱに向かう子どもたちの集中力には目をみはるものがあり、30分以上かけて、下絵を完成させた。それから色を塗るとき、細い筆で、トントントントンと点を描くように塗ろうという保育者のアドバイスを、すぐに子どもたちは取り入れた。それは大変な労力と根気を必要とする。しかし、その方法が自分の願いを実現することが分かれば、子どもはそれを取り入れるのである。どの子どもも、数日をかけて丁寧に、根気強く、作品を仕上げていき、その結果として大きな充実感と達成感を持てたようだった。ここには、意欲こそが学びの原動力であることが示されている。



完成



④ グループの木

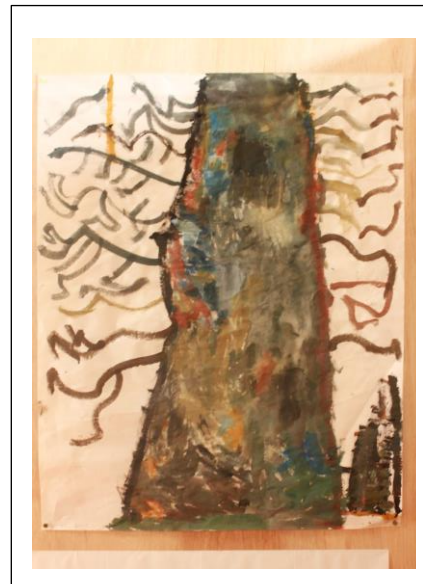
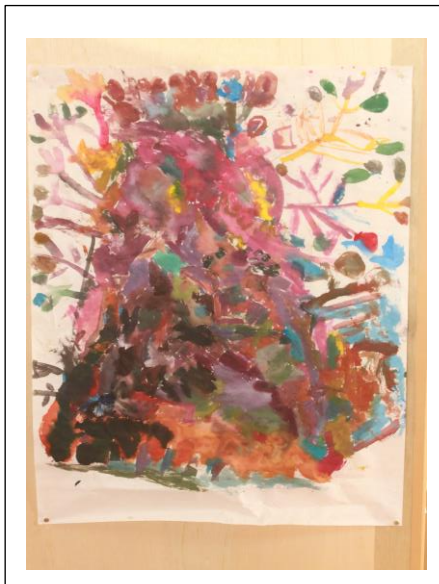
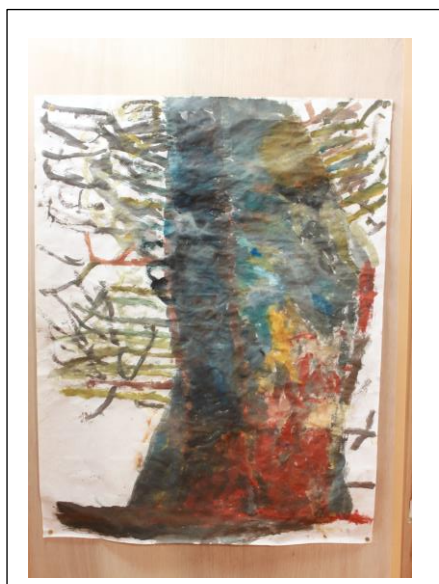
また、グループで描く木にも取り組んだ。取り組む時期、投げかけ方、紙の大きさ、環境、いろいろな点で課題が多く残った。全体的に、まだイメージを共有することが難しかったようだ。描きはじめるまでに、30分ほど意見を出し合っていたグループもあった。そのほか、ノリや勢いで描いたグループもあれば、人任せの雰囲気強いグループ、ケンカしかしていなかったグループ、話し合いながらイメージを共有して塗り込んでいくグループとさまざまであった。



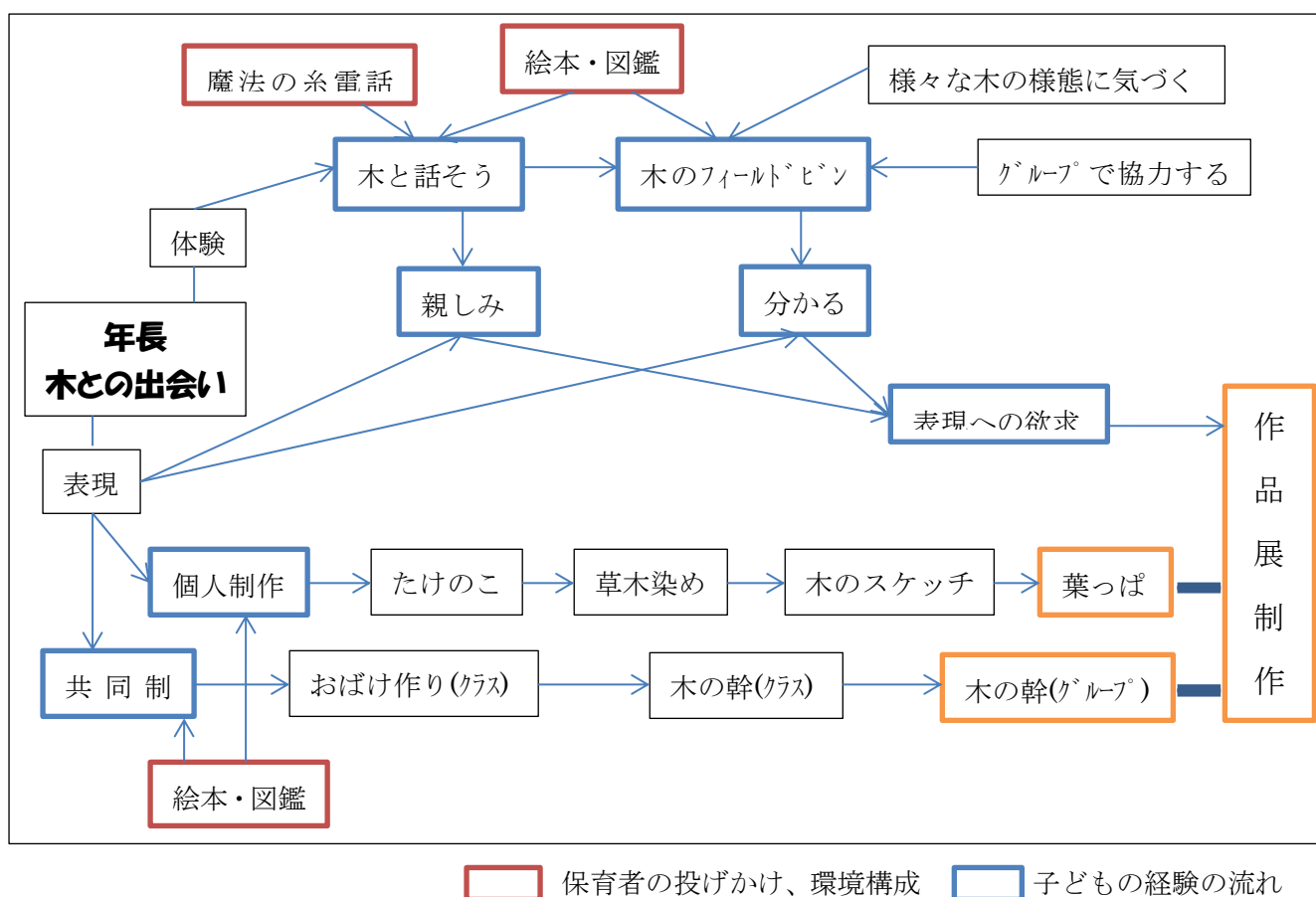
共同作品の場合は、個人の動きの自由さがある程度保証されることが大切なようだ。グループの木を作品にしようと決めて取り組む時期が遅かったので、一つのグループに対話を始めとする十分な時間がとれず、展示するスペースにも限りがあったことなどから、今一つ、子どもの中に達成感や充実感を保証できなかった。その意味では、やはり、保育における計画の大切さを痛感する。



完成



<年長児の取り組み>



(注) 堂本真実子「木のフィールドビンゴ」『すごい！ふしぎ！おもしろい！子どもと楽しむ自然体験活動』日本ネイチャーゲーム監修 神長美津子・酒井幸子・田代幸代・山口哲也編著 光生館 2013

3 発達をおさえた体験と表現

個人差はあるといえども、やはり学年による発達の違いは大きい。それは、言葉、経験、記憶、すなわち表象の能力の問題と深くかかわっている。2歳児は、目の前のことが全てである。テーマを「木」にしたからといって、例えば木をクレパスで描かせようと計画するのは無理がある。2歳児にはまだ「木」というまとまりが認識できない。体験的に、自然に親しみ、自分の発見を喜ぶ心を育てることの方が先決であるし、表現活動においても、行為そのものを楽しみ、その行為の結果から作品のおもしろさや美しさが生まれることを体感することが大切である。

年少児にしても、森に行つて木の全体像を把握することは難しく、それよりも「関わる」ことに重点を置いた方が、発達にふさわしいだろうと考えた。結果は、大成功だと考えている。拾う、並べる、積む、組み合わせるといった一つ一つの行為の結果からさまざまな喜びが生まれたということが、3歳児の表現活動としてふさわしかった。また、多くの言語を獲得する時期ならでは、イメージの広がりや深まりには目をみはるものがあった。それと同時に、材料を取り扱う能力が格段に伸びていったことも、注目すべき点である。保育者にとって嬉しかったのは、子ども同士響き合う姿と作品の一つ一つを大切に思う姿である。それは、全ての手続きを自分たちの手で踏んだからである。自分で選んで拾ったもの

であるからこそ（もちろん、作る際には保育者がたくさん補充してあるが）、一つ一つが意味を持つものになった。

年中児の「木」の表現は、年中児だからこそ描ける作品である。「木」というまともには認識できるが、対象への関わり方は直観的であり、その表現においても自分の感じ方や好みが優先される。それが、線の伸びやかさを生む。これらの作品は彼らそのものであり、子どもはこれだけのエネルギーを持っているということが圧倒的な力強さで示されている。どれも、大人の背丈は軽く超える。この作品を見た方々は、みな、最初子どもが一人で描いたものだと信じていなかった。私自身、これを見たときにはびっくり仰天したが、それ以上に多くの希望に包まれ、深い感動を得た。いかに体験が生む感動を学びへとつなげていくことが重要であるかを改めて考えさせられた。

年長児は、木との対話の仕方や見方が、年中児に比べて深いものがあつた。「木」との対話は瞑想を生んだし、対象を細かい点まで観察する姿が際立った。だからこそ、それを写したいという意欲もまた強かった。形態の全体像を描ける、細かいところが表現できる、見える色を表現できるといった点において、「葉っぱ」という小さな題材は、彼らにぴったりであつた。

発達をおさえるということは、実践的に言えば子どもの見方、感じ方の傾向性に沿うということである。そこで知識は大きな力となってくれる。しかしもっとも大切であるのは、目の前にあるその傾向性を捉え、そこから保育の方法と援助を見出していくことである。その点において、グループの木については、さまざまな課題が残った。反省点を次に生かしていきたい。

4 体験が生む表現と学び

子どもたちは、森で「木」やその落とし物にかかわるなかで、大きく心を動かしてきた。そこにあるのは、不思議さ、おもしろさ、親しみ、愛情、多様な命の在り方を感じる心である。そうした感動を表現に変えていく過程で、彼らは対象の微妙な違い、特質を見てとることができるようになった。

年少児はそのものの特質からイメージを膨らませていき、年中児はさまざまな木の様態があることを知り、微妙な色合いの違いを見てとった。そして、年長児は葉っぱという形態のまともとその色合いをほぼ完全な形で表現しようとした。感動を土台にして、その対象に自分なりに深く入り込み、自分の内的なイメージ、アイデア、情緒的感覚をある媒体を使って表現すること、これは大きな学びであり、高い知性の所産である。

これにおいて、材料や道具を使いこなす能力と限られた空間内で美的秩序を創り出す能力も必要とされる。年少児が獲得していった洗練さは、その能力を彼らが培っていたことを示しているし、「木」や葉っぱを描くためにはその前段階で墨や筆、はしペン、絵具に慣れておく必要がある。

また、ある空間内でその作品を美的におさめるということは、満足のいくかたちで完成させるという点で大変重要である。年中児が途中で椅子の上から自分の作品の全体像を見ている写真があつたように、自分の線を全体のなかで客観的に見ようとする姿は、自分の作品をうまく仕上げたいという意欲に直結している。保育者の声掛けもあるが、どの子どもも、自分の線をゆっくりと確かめながら、丁寧に作っていった。自分の行為を客観視する態度、自分の線と線の相互関係をみて、全体を把握する力、これも大きな知性である。2歳児の「ドングリコロコロ」で、最初のうちはガンガンと振ることを楽しんでいったのに、そのうち、動きの跡が気になってゆっくりと手の動きを調節するという姿も、これに通じている。

作品を成功させたい、美しいものに仕上げたい、すなわち作品を壊したくないと思うためには、自分のこれまでの作品に満足する経験やそのために試行錯誤する経験が必要である。だからこそ、2歳児の

表現活動においては、楽しさとおもしろさ、出来上がりの美しさに主眼を置く。それと同時に、お話ししながら自由に楽しく描いている結果がいつもまっ黒だったり、色遊びのなかで3原色が混ざった末は美しくない色であることを知ることも大切である。そうした経験が、筆はこまめに洗うことを学ばせたり、いい塩梅で止めるという動きをつくっていく。

いずれにしろ、体験と表現が連続していくことのもっとも重要な点は、それが深い達成感や充実感を伴った自己形成の道だということである。対象に対する自分の感動を自分の学びにおいて表現することを通じて、彼らは自分自身と世界に対する愛情を育んでいこう。こうした経験が、もし、彼らが大人になって何らかのコトの是非を問われたとき、さまざまな命の在り方を大切にできるような方向を、なんとなく、理屈抜きに選択していく姿勢の基盤となるよう、願ってやまない。

参考文献 E・アイスナー「美術教育と子どもの的発達」黎明書房 1986